

農福連携の新展開： 水耕栽培を利用した切れ目のない地域移行

川室 優 ●川室記念病院 理事長



水耕栽培で作った生命力あふれるバジルの葉

要旨

農福連携とは、発達障害などの様々な課題を抱えた人が農作業に従事することで健やかに社会参加する新たなケアである。近年、若年の発達障害をもつ人の農福連携が脚光を浴びている一方で、入院している認知症・精神疾患をもつ人にはその恩恵は十分に届いていない。

我々は新潟県上越市の精神科病院の入院患者を対象として、水耕栽培を用いた農作物の生産および料理からなる作業療法を実践することで、新たな作業療法プログラムを開発した。さらに就労支援施設と連携して農産物を用いた製品を開発・販売した。これにより、これまで農福連携の対象とされていなかった重度の障害をもつ入院患者における農福連携の可能性が広がった。

1. 背景と目的

わが国の農福連携は発達障害をもつ人の就労を軸に急激に発展した。一方で、入院している認知症・精神疾患をもつ人には農福連携の恩恵は届いていない。病院で農園を実装することの障壁は、農業技術の不足、持続的な労働力の確保の困難、重度の障害をもつ人の安全性の問題などである。

そこで我々は比較的少ない労力で収穫が可能な水耕栽培に注目した。精神科病床に入院中の人々が、水耕栽培に加えて収穫物を使った料理などの一連の作業療法を行うことで、症状安定化のみならず生活訓練の機会となるのではないかと考えた。さらに退院後の就労移行支援施設においても病院内の水耕栽培と連動することで継ぎ目のないケアの継続が可能になるのではないかと考えた。

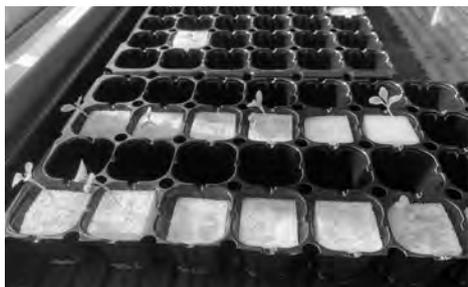
本研究の目的は精神科病床における水耕栽培を用いた作業療法の実装と、就労移行施設における商品化である。



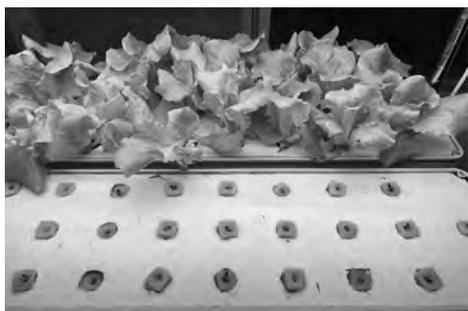
プラント全景

2. 現状の成果・考察

精神科病床に入院中の患者約20名を対象に、毎週火曜の午後に2時間程度の作業を行い、水耕栽培を用いた作業療法プログラムの開発を行った。これは作業療法士による精神科作業療法の枠内で行い、保険点数



苗づくり



苗を植え付け(手前)、育っていく(奥)



収穫を待つバジルプラント



料理の様子

を算定した。対象者は男女およそ同数、年齢は20代から60代まで多岐にわたった。疾患は統合失調症が半数以上を占め、それ以外は知的障害、てんかん、発達障害などであった。水耕栽培プラントを2台利用することで、常に作業があり、さらに収穫物があるというサイクルが可能であることがわかった。

作業は苗づくり、水耕栽培プラントへの苗つけ、収穫、料理である。毎回の活動終了後にミーティングを行い、次回の作業内容や料理を皆で決めた。

就労支援施設のスタッフと付加価値の高い商品の開発を行い、病院において月に2回

の会議を行った。その結果、バジルを用いたバジルパンの生産を行うことにし、市内での販売を開始した。



できあがったパン

3. 今後の展望

2つの方向がある。第1に、医療福祉の観点からは、より重度の障害を持つ人を対象に農福連携を広げることである。農福連携が精神的健康を向上させることは明らかであり、身体が健康でないという理由で排除されることはあってはならない。

第2に、ビジネスの持続性の観点からは、より付加価値が高く、質の高い製品を、納期を守って安定的に生産することが求められる。これにより工賃を上げることで、就労支援施設の利用者にとっては励みになるが、そのために参加者の選別が起きることが懸念される。これら2つの方向は複雑に絡み合い、時に二律背反となるが、我々は精神科病床における農福連携という新たな領域を開拓しなければならない。



開発会議の様子